

## 令和7年度第1回富山県孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム幹事会 議事録

日時:令和7年9月1日(月)10時30分~12時

場所:県民会館611号室(一部オンライン)

### 1 厚生企画課長挨拶

社会構造の変化に伴う孤独・孤立問題の深刻化が懸念される中、昨年4月に「孤独・孤立対策推進法」が施行され、関係者間における協議や、連携と協働の促進のため必要な施策を講ずることが、地方公共団体の努力義務として同法に定められた。

これを受け県では、昨年10月に「富山県孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」を設置したところ。11月に開催した幹事会においては、皆様からプラットフォーム会員等を対象とした勉強会のテーマ等についてご意見をいただいた。ご意見を踏まえ、昨年度4回実施した勉強会には、延べ246人の方に御参加いただいたところ。

本日は、事務局から、これまでの取り組み状況について報告したうえで、昨年度実施したプラットフォーム勉強会でのグループワークのまとめや、今年5月に改訂された国の重点計画等の共有、また、立瀬幹事長から令和5年度に実施した県民の孤独・孤立実態調査の分析結果をご報告いただく。

そのうえで、幹事の皆様方には、県の今後の取り組み方針等について、幅広い観点から、忌憚のないご意見をいただきたい。

### 2 幹事長挨拶

これから議事に入っていこうと思うが、孤独・孤立の問題については、ちょうど5月頃にテレビで、若者の孤立死が多いという話が出ており、今までとは違う様相の孤独・孤立みたいなものが社会でもクローズアップされるようになってきている。富山県でも調査を行っているので、現状を踏まえ、どういう風にやっていくことが孤独・孤立対策のプラットフォームづくりに一番、功を奏すのかという視点で、今日は皆様からご意見をいただきたい。

### 3 報告

資料1により説明(県厚生企画課)

参考資料1により説明(立瀬幹事長)

参考資料2、3-1、3-2により説明(県厚生企画課)

参考資料4により説明(県健康課)

### 4 議事

資料2、資料3により説明(県厚生企画課)

### 5 質疑応答

【高和幹事】今、各企業では、健康経営が大きなスローガンになっている。進めていくうえで、一番大きな問題が、

メンタルヘルスの不調への対応である。ある企業の社長とお話をする中で、自分の会社の社員のなかで、管理職を含め、なかなか会社に出てこない社員が目立つという話を聞いた。さらに、話の中で相談窓口を人事部に置いている、という話を聞いた。人事部に相談窓口を置くのは、最悪だと思う。人事評価にも影響するので、相談に行けないと思う。企業の認識度には高低差があると思うが、なかなか配慮できていない企業があること知り、ショックを受けた。この幹事会には、企業の方が来ておられないが、このような取り組みを企業に伝えることも必要だと思う。

もうひとつ、30代女性の孤独感が高いというデータの話があったが、私は、これは、こどものときのいじめが反映しているのではないかと考えている。30代の方たちは、いじめが、凄まじい時代に小中学生を過ごしてこられた方たちが多く、そのいじめによるトラウマのようなものを抱えながら生きておられる世代ではないかと思う。いま、文部科学省も不登校の子の追跡調査をしている。いじめは、人権侵害の最たるものであって、いじめにあった子たちの中には、十分に学校生活ができなくなり、就労に対しても大変影響を受けており、いまだに苦労しながら生きている人がいっしょに。孤独・孤立というのは、根が深く、その方の人生、命そのものに関わっていく事柄にもつながっていくと考えている。一昨日、学校が始まったときに私のところに小学6年生の女の子から「助けてください」という電話が入った。学校内でも追い詰められている環境が未だに続いており、そういったところも含めた孤独・孤立の取り組みが必要ではないかと思う。

【立瀬幹事長】これについては、後で検討事項の中に入れていきたいと思う。

#### 【炭谷幹事】

あらゆる年代の方の孤独・孤立のところに主観的健康観というのが関係してきている。どちらが先かという話なのだが、健康問題を切り口にして関わるという方法がひとつある。現在行われている活動の中に「まちの保健室」というのをやっている方たちがいる。そこから精神的な問題の支援に繋いでいくという活動をやってもよいのではないかと思う。母子に関しては、開業助産師が、その役割を果たしている部分もある。看護職を、もっと、そういったところに引き込んでいくことや、リタイヤした人、保健師に、そのような場所の開設に関わってもらえれば、各町内会単位で「まちの保健室」開設事業ができるのではないかと思う。各町内会や校区ごとに、人材がどのくらいいるのかということ进行调查したり、活動できる場の設定を上手く支援することで「まちの人が、気軽に行ける保健室」という事業ができれば面白いと感じる。助産師には開業権があるが、保健師にはない、ということがあがるが、このデータを見て、もっと看護職のOBを活用できれば、広げられるような気がしている。

【立瀬幹事長】民間との連携も考えていくことや、ナースケアのようなものを上手く活用した居場所づくりの提案とってお伺いしていた。

【五十嵐幹事】ゲートキーパーネットとやまでは、研修会の後、参加者同士で孤独・孤立を防ぐには、どういうことをしたらいいか話し合っており、こちらにでている「場所を設ける」や「イベントをする」、「閉じこもっている人に何とか足を向けさせる企画を考える」ということは、ほとんどの皆さんが考えておられ、意見も出ていた。いくら声掛けをしても、一切、町内のイベントに参加しない、という方も当然おられる。その方たちに対し、そこに関わ

る人はどうしているかという、どんなに出てこなくても「あなたを忘れていませんよ」、「私たちはあなたを見ていますよ」というメッセージとして、必ず声掛けやポスティングをし、孤独・孤立でいることを尊重するというスタンスで関わっているという参加者からの事例があった。新しい視点だと感じ、そういうことも必要だと思っている。

ゲートキーパーは、地域に密着したところで活動することなので、専門家や資格を持った人でなくていいので、私たちは、地域で頼れる人、すなわち、「あの人に聞いてみると、繋がる場所を教えてもらえるみたい」という位置づけになれるような人が育っていくことを願い、研修会をしている。

【立瀬幹事長】「頼れる人」は、エビデンスベースでも必要だという風にてきている。私は、世代を超えたような交流が、ひとつのキーワードだと思っており、好事例をお持ちの方はいらっしゃるか。私が一つ思いついたのは健康マージャンがある。いろいろな世代の方々がワイワイやっていると聞く。

【炭谷幹事】イースポーツがある。イベントでイースポーツをやると、老人クラブの人やサロンをやっている人が中心になって、そこに、子どもたちとその親も来て、多世代交流が進んでいく。また、ある地域の事例で、イースポーツをやろうと思うと、機械の接続が大変なのだが、ひきこもり状態の高校生を連れてくると、喜々としてそれをお世話してくれ、皆の頼りになる存在として、居場所になってきているという例があるので、ツールとしては、イースポーツは、面白いと感じている。

【立瀬幹事長】イースポーツの意見がでたが、事務局から、イースポーツの県の担当や連携先についてなど、そういう情報はあるか。

【竹部係長】イースポーツ振興は、市内でもキーワードになっている。

【立瀬幹事長】SNS やデジタルデバイドの問題がありそうというデータの話から、高齢者対策として、イースポーツを推進する課と組んで、地域の高齢者が外に出てくるときに、多世代交流としてそういうのを図るというものひとつの手ではないかと思う。

この他に、孤独という言葉を使わなくても、総合的に支援する施策についての提案はあるか。できれば、先ほどからもあるような孤独感が高い30代、40代の女性や、40代、50代の男性等に対して必要な施策など、意見があればいただきたいが、石動幹事はいかがか。

【石動幹事】シングルマザーの方あるいはシングルファザーの方の中に、望んで孤立を選択される方がいらっしゃる。望まれる理由として考えられるのが、ひとつは、人を信頼できなくなっているため。なぜ、人を信頼できないかという、理由のひとつに、DV被害あるいは家庭での虐待を受けた経験がある方、他には、先ほど高和幹事がおっしゃったように、学校時代に他者からの強烈な人権侵害、すなわち、いじめを受けた方など、様々な逆境的な経験を受けたことで、人を信頼できないことから、孤立を選択される場合がある。特に、役所の言うことは信用しないという方がいらっしゃる。そういう方が、孤独の状況になってしまっている事例が少なくない。予防策としては、いま市町村で設置された、子ども家庭センターの相談担当の方が、役所の人間ではあるが、それ

以上に、人間としての魅力をお持ちになって相談関係が成立する事例がある。待ちながら、様子を見ながら、時間をかけて積極的な待ちのポジションで支援している事例がある。今後、つながりサポーターの皆さんには、ブラッシュアップとして、さらにその様な考え方もお持ちいただけたらと思う。

【立瀬幹事長】積極的な待ち、という言葉は初めて聞いて非常にインパクトが強かった。私がいつも孤独・孤立でお話する、しゃべりかけてもいいベンチも、ある意味、積極的な待ちだと思う。話しかけてもいいし、話しかけてこなくてもいいという環境をどうやって作っていくかというのも非常に大きなキーワードだと思う。

「この人なら喋っていい」いわゆる「信頼できる」というのは、研修で、できるようになるか。

【石動幹事】研修することによって、できると思う。まずは、こちらの方が急がない、相手のペースに合わせる、昔から言われるクライアントセンター。さらに、もうひとつ大事なことは、リスク感覚をもつということ。両方持っていることが、大事だと思う。特に富山県の県民性として、まじめな県民というのが、様々なアンケートや調査で上位に挙げられているようだが、まじめだと、早く問題を解決してあげたい、という親切な心がでてくるのだが、そこを我慢して、相手のペースに合わせる、という考え方なので、それは、トレーニング等でできるのではないかと思う。

【立瀬幹事長】勉強会などで検討したいと思う。他に何かあるか。

【鈴木幹事】富山県の調査では、40代、50代男性、30代を中心とした女性に孤独を感じる人が多く、さらに全国と比べて少し際立ったところがあるというご指摘だったと思う。この部分の割合が高い要因をきちんと分析して、はっきりさせることで、もう少し焦点化したような予防の対策につながるのではないかと思う。先ほどから過去のいじめの影響や、いま、石動幹事からは、シングルマザーの方の事例の詳しい話があったが、各事例ごとの一種のナラティブとしての要因を、もう少し詳細に聴きとってよいのではないかと思う。孤独・孤立対策というと、少し漠然とした感じのものになってしまい、なかなか具体的に明確になりにくいと、当初から感じており、そのあたりも少し考えてみてよいと思う。

【立瀬幹事長】物語に触れる、すなわち質的調査をしっかりやって、典型的な事例を洗い出すという方法はひとつあると思う。孤独に陥るプロセス、先ほど石動幹事からもあったが、望んで孤立を選択される方は、どのような環境に置かれ、どのようなことをきっかけに、そのように自ら孤独・孤立を選択していくのか。それは、ひとつの大きなテーマだと思う。私の方からも、後日、事務局と相談し、そのような調査が実現可能かどうか相談させていただければと思う。心の健康センターが具体的な事例が集まってくると思うが、麻生幹事いかがか。

【麻生幹事】精神医療の普及啓発については、ずっと考えている。多くの恩師から、「何でも相談するところを作ってください」と言われたが、そのようなところを作るのは、予算など様々な事情から、難しい。心の健康センターでは、時間から時間の相談あるいは曜日から曜日の相談をやっているが、もう少し、広げてよいのではないかと思いつながりながらやっている。何でも相談するところが、本当にできたらよいと思っている。窓口よりも交流の場

という話があったが、窓口も大事だろう。

もうひとつは、居場所。先ほど健康課から、「CAFE ゆりの木」の紹介があった。心の健康センターに相談に来られる方は限られている。ニーズがある人の数パーセントぐらいしか来ていないと思う。ギャンブル依存症などで困っている人は沢山おられるが、来られる方は、ほんの少数である。その他、多くの方にどう関わっていいのかが考えるとき、カフェのような場をつくるのが大事だと思う。場があってこそ、いろいろな議論ができる。気軽に行ける場ができたことは、非常に良いことだと思う。

具体的なことでいうと、30代の女性は、やはり深刻だと思う。先ほど鈴木幹事がおっしゃったように、なぜそうなっているのかという要因は、絶対探るべきだと思う。ただ、探るときにどうしたらいいのかというと、その方々の属性で調査することが一番大事。そうすることで、何か見えてくるものがあるかもしれない。私は、多くの方が非正規なのではないかと想像している。さらにシングルマザー又はシングルファザーなのかもしれない。生活が不如意な方は、当然のごとく、孤独だと感じる。生活の不如意さは、どこにあるかというと、収入の不安定さであったり、なすべき日々のタスクが安定しないということもあるのではないかなと思う。

【立瀬幹事長】働き盛りの男性については、何かないか。

【麻生幹事】男性について、ひとつ言えるのは、雇用の安定性。雇用というのは、とても大事。どこでそれを相談できるかというと、やはり「何でも相談所」だと思う。心の問題ではなく、生活の問題だというときに、心の相談では、難しい。心と生活はかなり密接なパラレルな関係もあると思うので、このような「何でも相談所」が、どこかに本当にできないかと思っている。個別のことについては、具体的なことを議論していかないといけない。さらに、こどもの自殺に関しても、議論が始まったばかりのように感じている。相談は、外部に相談する前に、まずは内部で相談しないとけない。教員に相談しないとけないという思いがある。

【立瀬幹事長】麻生幹事が、広く網羅的に話していただいたが、それに何か付け加えや、コメントなどがあるとありがたい。

【鈴木幹事】私も、主に若者を対象としたものを考えているのだが、日常的な学校生活や家庭生活などのありふれた悩み、本当に些細なことから、精神疾患から生じるような困りごとまで、幅広く、全ての悩みごと、相談ごとなどを受け付けるような単一の場所があるということが大事だと思う。そうすると、そこには様々な対応する人がいないといけないが、やり方はともかくとして、様々な多様な問題に対して、ワンストップで対応できるような場所が、とても重要だと思う。それが、全ての年齢の人に対応できるものであれば一番よいが、若者であれば、若者が集まりやすい場所に設置することが大事だと思う。先進的な国、例えばオーストラリアでは、そのようなことがかなり前から進んでいるが、日本でも、そのような必要性は、段々認識されてきていると思う。そういった意味で、健康課から報告があった「CAFE ゆりの木」は、富山県としては、私は、重要な最初の一歩だと思ってお聞きしていた。もし、これを発展させていくのであれば、開設している日や時間、場所が適切なのかどうか、今後検討していくことになるのだらうと思ってお聞きしていた。そのような意味で、孤独・孤立というレベルの問題から、医療が必要なレベルの様態まで、最初は一か所で受けるという仕組みは、とても大事だと私は思う。

【立瀬幹事長】精神障害者対応としては健康課だけれども、孤独・孤立対策としては、厚生企画課というように、連携してどうやっていくか。少し困ったことがあったらすぐに対応できることは、すごく大事なことだと思う。表向きは、しゃべりかけてもいいベンチレベルだとしても、どこかに繋がっていかないと、単に表向きだけの孤独・孤立対策になっていくと思うので、それは今後の大きな課題として、私の方でも幹事長として県と相談していきたいと思っている。

【立瀬幹事長】プラットフォームで、本日いただいた意見を具体案に変えていくような作業をしていけたらと思っている。また、最初に高和幹事から意見をいただいた企業も巻き込んでいくということも、広がりの中ではひとつ必要なことだと思う。井山幹事はどうか。

【井山幹事】多世代との交流であったり、そういうところに関して言うと、獅子舞がそういうものに大きく寄与しているのではないかと思う。過去、保護司として関わってきた事例として、子どもさんが学校を辞めることになり、今後どうしていくかというときに、獅子舞をきっかけに地域に溶け込めていった例がある。多世代というところというと、上は 70 代、80 代、下は、小学校に入る前の子どもさん、さらにその親御さんが出てこられるところもある。限られた期間であるが、それをきっかけとして、その後の地域内の交流に発展していくのではないかと思う。獅子舞の持つちからは、大きなものがあると思っている。

【立瀬幹事長】今日は地域の話がほとんどなかったなので、ありがたい。

( 以 上 )